

# 現代信州の洋画

(主に戦後に活躍した作家について)

調査研究係 大島 和 芳

信州に生まれ、ずっと住みついて描いて来たが、いざどんな作家がどんな思いを持って描いていたのかを問われると困ってしまう。まして日本中の画家の事には思いは及ばない。

せめて自分の描いている洋画について信州洋画の主な流れと戦後に活躍した作家について知ろうと思った。全国創元会の皆さんが知っている信州出身の作家、ゆかりのある作家（戦争中に疎開し信州の現代洋画に影響を与えた作家はかなりの数がいる）と合わせて記しておきたい。

大正三年二科会の創立に、石井柏亭・有島生馬・横井弘三・林倭衛・中川紀元・小山敬三・中村善策・滝川太郎・中村琢二・島崎鶏二・宮川仁・オノサトトシノブが出身・ゆかりの作家として参加している。昭和十一年創立の一水会に何人かがメンバーとして加わっている。柏亭・生馬は二十三年からの長野県展などで、信州美術界を指導している。

大正十一年の春陽会に関係した作家には、山本鼎・倉田白洋・足立源一郎・河野通勢・林倭衛・高橋貞一郎・藤井令太郎がいる。また官展である文展・帝展で活躍した作家は神津港人くらいで、在野団体に活躍した作家に比して少ない。信州人の持つ在野反骨の精神がそうさせたかも知れない。

先に挙げた内の太平洋戦争中の疎開していた作家の影響が、戦後の現代作家にかなりあると考えた。独断と偏見で日展作家・私の制作活動に少なからず影響を与えてくれた作家八人を挙げておきたい。

## 吉野 純

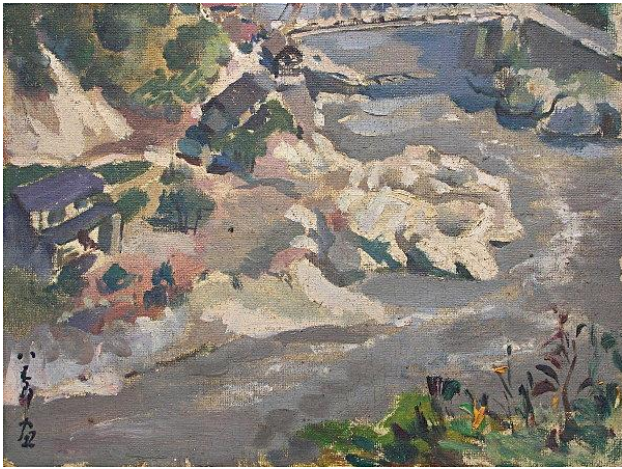
吉野純の世界は宮本三郎との出会いから始まる。二紀会の総帥宮本からの勧誘で昭和三十年から出品、たて続けに受賞する。

旧約聖書の中からの題材が多く「ノアの方舟」では朱のように深い色調に特徴があり素朴な形態とともに作品の魅力になっている。

一九二二年長野県臼田町に生まれる。東京師範学校芸術家を卒業、講師を経て教授となっている。フランス留学したことで吉野の西欧古典美術研究が本格化される。社団法人二紀会の副理事長となっている。



吉野純「聖家族」



辻村八五郎「橋のある風景」

#### 辻村八五郎

大正三年（一九一四）東京都台東区下谷に生まれる。岡田三郎助から本格的に絵画を学び東京美術学校師範科を卒業、光風会への出品を始める。昭和十九年三十歳の時長野市に疎開。昭和二十一年の第一回日展で「新粧」が入選。その後辻永に師事、昭和二十四年第五回日展で「編物」が特選となり無鑑査出品となり会員となる。光風会理事となり日展では「室内」が内閣総理大臣賞となり日展参与となった。

裸婦を中心としたオーソドックスな描き方で多くのファンがいる。長野県内の美術家たちに与えた影響は大きく後進の指導にも力を入れた。信州生まれではないが特筆すべき作家の一人と言える。



宮浦真之助「昼下がりの街角」

#### 宮浦真之助

一九二八年松本市生まれ。県内小中学校の美術教師となり三十七年間、勤めながら独自の模索と多彩な活動を展開している。宮浦の真骨頂は一版多色の版画である。タブローの大作を描く時間と同じで、手間と煩雑な手法を用いている点に驚かされる。版画でありながら二度と同じ画面は複製されず、日展特選になった作品、日本水彩画会、示現会等への大作は一点制作のみとしていた。

大作の版はシナベニア板を使用し主に線彫りして版を作る。この後黒色のラシャ紙などを版に貼り同じ所に紙が当るようにした後、気の遠くなるような作業をしながら刷っていくのである。宮浦がこの技法を発見開発し広めていたと言っても過言ではない。

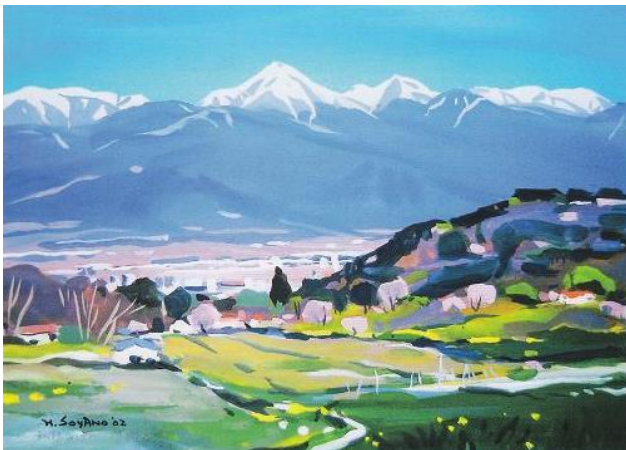


西沢今朝夷「戸隠高原初秋」

### 西沢今朝夷

一九二九年長野市に生まれる。国鉄に勤めながら水彩画の研究に努力していたようである。一水会や日展に出品された作品は石井柏亭も賛辞を惜しまなかった。風景画が中心であるが、民家、町並、神社、山、川など題材が四季を通じてとなると大変と思われる。北信濃を描いた雪原がすばらしい。一度後から描くところを見せていただいたことがある。

空を彩色する場所に平筆でスーッと水を引いた。じっとそれを見ていて七分後ぐらいだったと思う。二、三分で滲みのある美しい空が出来上がった。その時二十年以上も前であるがその紙がアルッシュだと初めて聞いたのである。カルチャーが人気だが、指導を受けたい人が順番待ちというのも驚いた。



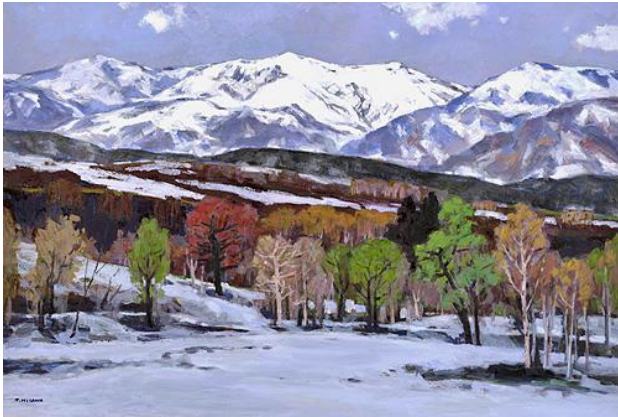
征矢野 久「桜のころの北アルプス」

### 征矢野 久

長野県では現在は創元会の出品者が多いが征矢野久が出品を始めた頃（昭和四十年代）は会員に樽見盛衛がいたぐらいである。

本名を久茂といい一九二九年生まれである。県内で小中学校の教師をしながら画業に専心していく。一水会の木村辰彦、小林邦に師事、油を描いていたが石井柏亭の指導も受け水彩画に転向している。五十一年に水彩画会の会員、五十四年に創元会の会員となっている。安曇野の日没直後の情景をコバルトのシルエットで描き水田の明るさがよりリズム感を出している作品で日展に八回入選している。安曇野で暮している本人だけが気づく色なのだと考える。自身もマルチ人間と言うだけあった、音楽、パソコン、漫画、技法書も多く出版している。郷土作家の顕彰活動なども行っている。





三沢 忠 「残雪に芽吹く」

### 三澤 忠

一九三五年、中野市生まれ。桜井慶治に師事。光風会第五〇回展、昭和三十八年に「那須高原」で初入選、四十年に「高原」が入選。

四十六年の白日会展に「雪の山村」「冬の北信濃」で白日会会員に推挙された。日展で五十八年に「豪雪」六十一年に「雪の村」が特選となる。平成五年に日展会員となり、文部大臣賞も受賞、信州の雪を描く作家として白日会、日展で活躍中である。

かれこれ五十年以上雪景色を追求しているが、信州の北信濃の雪の中に身を置いて修行僧さながらの苦闘を続け、白一色のなかにそこに暮らす人々の生活の匂いを感じ取ろうとしている。酷寒の風景ではなく、温かな人間の体温を感じさせる作風である。



篠原 昭登「草原の丘・六月」

### 篠原 昭登

一九二七年長野県茅野市に生まれる。東京第三師範（現東京学芸大）美術科卒業。田崎廣助に師事。昭和二十七年光風会、一水会に入選、昭和三十三年「甲斐駒」で日展初入選、平成二年第二回日展で「朝倉山五月」が特選、二六回日展で「和田村五月」が特選となり審査員を経て会員となる。現在一水会には棚田シリーズ、日展へは里山シリーズ、木崎湖などで取材、山のもつ立体彫刻のような力強さで新たな取り組みを始めている。



池田満寿夫「動物の祭り」

#### 池田満寿夫

版画、陶芸、小説など多彩な活動で知られるが、一つのスタイルにとどまることを嫌い自己否定にも似た変貌をとげた芸術家であった。好奇心と情熱をもって未知の分野へ挑戦する姿勢は生涯続いた。

一九三四年満洲奉天に生まれる。東京芸大三度の不合格を経て断念。画家瑛九の助言で色彩銅版画を始め東京国際ビエンナーレ展、他国際版画展で数々の受賞。三三回ヴェネツィア・ビエンナーレ展で大賞に輝き最高の評価を得る。リトグラフ、コラージュ、水彩、フロタージュを取り入れ数々の技法を手がけた。小説でも「エーゲ海に捧ぐ」で芥川賞を受賞、映画制作、陶芸、コンピューター・グラフィックの導入など新たなメディアへの取り組みを行った。さまざまな変遷の底流に奔放な生命の姿が垣間見える。完成熟練よりも、自らの破壊と創造を繰り返し永遠に変貌を続けることで、自己のあらゆる可能性を追究しようとした自身の生きざまの反映がある。

自らの出発点である油絵を再開することに意欲を燃やしていた矢先平成九年三月八日に急性心不全のため逝去。

#### ◎参考資料

長野県美術全集 6・7・12

株式会社郷土出版社発行